

「う、うーん」

淳は寝苦しさを覚え、ゆっくりと目を開ける。しかしその光景があまりにもおかしかったためにそれを夢だと思い、再び目を閉じる。結果、首が後方に流れていき、完全に寝入ったとき、首が結構な速さで後ろに落ちる。そして壁に思い切りぶつかるのだった。

「い、いった。なんなんだ」

そしてその結果目が覚めた淳はようやくいまの状況を飲み込むのだった。

結論から言ってしまうえば、淳がいまいるところはそこそこ広い倉庫だった。ダンボールがいくつも置かれ、埃くさい。建物の柱梁が鉄鋼できており、それが露出している。また、天井はジグザグのプレートであった。まさに倉庫、物置という言葉が合う場所だった。淳はそこで縛られ、壁によりかけられるような形で床に座らされていた。そしてそのすぐ隣には雄二がいた。その雄二は淳の頭をぶつけた音で「うーん」と起きかかったが、またすぐに寝てしまった。

「雄二、雄二！」

「なんだよ、淳。うるさいなあ。ってか何で俺んちに淳が…  
…。あれ？」

雄二は淳に起こされ目を覚ますと、あたりを見渡す。そしてその状況の異常さに気がつく。「なんだこりゃー」と叫ぶのだった。

「淳、おい、淳！　なんだよ、これ」

「いや、僕もよく分からないんだ。おきたらこんなことになってて」

「よく分からないって何だよ。どうなってんの、これ？」

「だから僕もよく分からないんだ。第一、僕も今起きたばかりなんだ」

「え？」

「本当だよ」

「マジかよ。なんなんだよ、これ」

異常事態に気がついた二人は、とりあえずこの状況になるまでの経緯を話し合うことにした。

「僕は普通に朝起きて、そしていつもどおりに学校に向かっ

たんだ。でも、あれ？　そういえば学校にいつている間に：  
…。そうだ、なんか後ろから口をふさがれて」

「あー、俺もそうだ。思い出した。なんか口をふさがれた瞬間、急に眠気がして、気がついたらここか」

「そう、だね。僕も」

「うっわ、まじかよ、これ、誘拐だろ、やばいだろ」

「う、うん」

「やばい、やばいって」

淳は落ち込み、雄二は軽いパニックになっているようだった。そして淳は沈んだ声で「僕たち、これからどうされるのかなあ」と雄二に聞いた。

「どうって、そりや、あれだよ。誘拐って言ったら目的はあれだろ、あれ。身代金とか」

「そう、だよな。やっぱり」

「あ、でもわかんねえわ。拉致とかかもしれないし」

「拉致って、あのテレビとかで放送されてるどっかの国に送られちゃうやつ？」

「そう、それ。うっわ、マジ怖くなってきたんだけど」

「うん、そうだね」

二人のきは沈んでいた。そして30秒ほど沈黙があつたが、しかし雄二は何かに気がついたらしく、うきうき顔で淳に話しかける。

「そうだよ、淳。俺たち能力者じゃん。誘拐犯くらい、ぶつたおしてやろうぜ」

「え？」

「いやだから、誘拐犯、倒しちゃおうぜ」

「無理だよ、そんなの」

この言葉に雄二は少し腹を立てて、「何でだよ！」と言葉を荒げていった。

「だって、考えてごらんよ。相手は誘拐犯だ。拳銃だってもってるかもしれない」

「もってるかも、だろ」

「でも、もつてたらどうするんだい？ 第一、僕らの操るものがないじゃない」

「おいおい、水や火なんて、どこにでも手に入るだろ。水はそこらへんの下水でも使えばいいだけ出し、相手がタバコ吸

うなら、そのときに火は手に入るし」

「でも、相手が銃を持ってたら、いくら僕らが能力者って言うっても太刀打ちできないよ」

「だから、相手が銃を持っているかどうかなんてわかんないだろ！」

「それは残念デスネ」

「！：！」

二人は突如現れた声に驚き、そしてその声の元に振り向く。そこには倉庫の大きな扉を開けて入ってきた一人の青年の姿があつた。倉庫の扉から見えた空の色は暗く、いまはもう夜だということ告げていた。そして暗かったが故に青年の正確な顔までは見れなかった。

「残念ですが、持っているんデスよネ、銃。それに貴方たちがどれほどノものは知りませんが、まだまだ能力を覚えさせてなのデシヨウ？ 私のテキでハありませんね」

「へえ、じゃあやってみるか？」

青年の高圧的な言葉に雄二はいらだった声で答える。しかし青年は「フ」と肩を少しあげて笑う。

「えエえエ、別にカマイませんよ。ただ、一言だけ言わせてもラえるなら、私はハッキリ言つて、かなり強いですよ。ソウデスねえ、大体貴方たちの師匠さんくらいの強さハありません」

「慎先生くらいの実力ですか？」

「エエ、そのくらいですね」

「んなわけあるかよ！」

「まあまあ、そうカツカしないデ」

「何が、目的なんですか」

青年は淳の質問に感心した。この状況下でたとえ少しでも冷静に思考できたからだ。普通は雄二のようにいらいらしてこちらに敵意をむき出しにするか、おびえるか。数は少ないが、無気力になるものもある。しかし淳はそのどれとも違い、冷静にこちらの意図を見定めようとしていた。もちろん、完全に冷静などではなく、おびえが8割くらい入っているが。しかし以前の彼ではおびえだけであっただろう。それが、白藤の一件を乗り越えたことにより、強くなっていた。

「目的、ですか。ま、イイデシヨウ。口封ジもされてません

シ。私達の、イエ、私の目的ハ、貴方たちを人質ニ赤イ死神をおびきだすことですヨ」

「慎先生をおびき出す？」

「ザツツライト、と英語でハ言うのですカね。まあ、正解デ  
す」

「てめー、何が目的だ」

「だから、貴方たちを人質に……」

「そうじゃねえよ。何で慎先生をおびき出そうとなんてして  
るんだよ！」

「あ、ソツチですか。いやね、僕も面倒クさいんですけどね。」

ワザワザ日本まで来て、そのこのトップクラスの赤イ死神とや  
りあうのは」

「やりあう……、ですか？」

「エエ。でも仕事じゃあ、しょうがないじゃないですか。モ  
チロン、断ろうと思えば断れマしたよ。でも、断つたら、私  
ハ赤イ死神に勝てないから断ったつてことになるカもしれ  
ません。モシそうなたら、私ノ信用はガた落ち。商売上ガ  
つたりになつてしまいます」

「ふざけんなよ、お前！ ぶったおしてやる」

「ハイハイ、わかりましたわかりました」

「僕たちを人質に、慎先生を一方的にたたたくつもりですか？」

「ホウ」

雄二はさらに怒りのボルテージを上げていたが、反対に淳はもの冷静だった。淳たちを人質に慎をおびき出すといった後は、さらに冷静になり、その目からはおびえの文字は薄れていた。当然、青年もそのことは気づいており、また感心した。

（ソれにこの少年だけでハありません。この状況下で私二敵意をここマデむき出しにできるのもスばらしい）

「安心してください。私ハあくまで喧嘩屋ノようなものです。人質をとるのハ彼をおびき出すところまで。戦いが始まってしまえば、貴方たちを人質にスルなんてことはしませんよ」

「そんなこと、分かるか！」

「まあ、私ガ何を言ってモ信じないでしょうね」

言い終わると青年はクスリと笑って、入ってきたドアから

出て行く。その瞬間、外から少し光が入ってきて、青年の顔を照らした。青年は身長は一七〇くらいだろうか。中肉中背で、すこし肩幅がある。さらさらの茶髪をなびかせた少し丸っこい童顔だった。だがそのどれもがかすむほど強烈だったのは目だった。ものすごく細いつり目で、二人のことを見ながら出て行った。だが、その瞳は明らかに異常で、もしも青年の顔が見えていけば、二人は先のように振舞えなかつただろう。それほどまでに青年の目は、その一瞬で二人に恐怖を与えていた。そう、それは二人が初めてみる正真正銘の人殺しの目だった。